報徳@なう

発行人
滝本一男

理事長が交代

5月 24 日の報徳食品支援センターの総会にて理事長が本岡俊郎氏から滝本一男氏に替りました。また中嶋孝昌氏が理事に新任されました。

退任のご挨拶　前理事長　本岡俊郎



令和七年五月で理事長職を退任させていただきました。令和四年五月の総会で初代理事長の田嶋享氏から引き継いで三年が過ぎました。

令和元年頃、ヤオマサ（株）を創業された田嶋さんから小田原でフードバンクを作りたいから手伝って欲しいと頼まれて、小田原にやってきました。事業が軌道に乗ったら身を引くつもりでしたが、令和二年二月発足後まもなくコロナ禍が襲来し想像もしていなかった事態に巻き込まれました。私にとって小田原は、平成二十一年名古屋でフードバンク活動に取り組んで以来、手掛ける四つ目のフードバンクでした。大都会でなく地方でも自立できるフードバンクを作り、特に高齢者への支援に力をいれたいと漠然と考えていました。しかし、発足後間もなく襲ってきたコロナ禍で状況は一変しました。

非正規雇用のシングルマザーたちは、収入が途絶えて、箱根の温泉街は観光客が激減し、大勢の人たちが職を失いました。芸者さん達も悲惨な目にあいました。食糧支援が必要な方がいきなり大勢現れました。各市町行政や社会福祉協議会との連携で食料支給体制を整えました。他方、販路を絶たれた飲食店向けの米や食材などが大量に提供されるようになり、受け入れ態勢を整えるのもひと仕事でした。ようやく二年ほど前からコロナ禍も収まりましたが、その次には、消費者物価の上昇が始まり、現在の米不足と高騰に至っています。また、コロナ禍とは異なる貧困の課題に直面しています。

急速に活動規模が大きくなったために、一番苦労したのは、運営資金でした。できるだけ多くの方に協力していただきたく努力をしました。幸い初代理事長田嶋氏の幅広い人間関係のおかげで、地元の多くの皆様に会員になっていただくことができました。ありがたいことです。但し、会費収入だけではやっていけませんので、様々な助成金を申請するという不安定な構造は、今も解決されていません。

発足後五年以上経過して、我々の活動に理解を示していただく方も増え、行政の福祉関係者と協力することも次第に増加してきました。報徳食品支援センターも神奈川県西部地域に根付いてきたなと感じるようになりました。

私自身も七十八歳と高齢になり、後継者として理事の若い滝本一男さんにお願いいたしました。滝本さんは、小田原市在住で、コンピュータ関係に優れた技と能力を持っておられます。新しい理事長の采配に期待しています。

私自身は、次は外国人労働者が大勢働いている群馬県邑楽郡大泉町で主に困窮している外国人のためのフードバンクで働くつもりです。怪我や病気で働けなくなった時、止むを得ず仕事を失った時に頼れるフードバンクを整えたいと思います。

これまで支えて下さった地元小田原をはじめ関係者の皆様に心から感謝申し上げます。



本岡さんへの感謝の言葉

初代理事長・ヤオマサ（株）名誉会長　田嶋享



フードバンク報徳食品支援センターを開設した5年前2019年12月に本岡さんに副理事長として、フードバンクの立ち上げにご尽力いただきました。横浜にお住まいですが、小田原でアパート住まいをされ、平日は報徳食品支援センターに勤務していただきました。

立ち上げすぐに新型コロナの流行が始まり、世界的観光地箱根のお客さんが激減しました。箱根に働く多くの人々、さらには小田原市内の人たちの仕事がなくなりました。その日の食事にも困る方が多く発生し、報徳食

品支援センターは最初からフル回転でした。

本岡さんのお力でそういうフードバンクの仕事をスムーズに立ち上げ、困窮していた多くの人たちの支援を行うことができました。また、フードバンク業務に長年携わっていた関係で、食品の調達も円滑にできました。まさに天明の飢饉の際の二宮尊徳の活躍を彷彿させるものでした。

さらに、3年前、私から理事長職を引き継いでいただき、報徳食品支援センターを当地における福祉拠点として確立していただきました。当地の人々を代表して、本岡さんには感謝を申し上げます。

この度、群馬県（邑楽郡大泉町のフードバンクの支援に大泉町に住まわれて、外国人を対象とするフードバンクを指導されるとお聞きしました。まさに、報徳仕法の現代版と思います。本岡さんの、ご健勝と一層のご活躍を祈念して、感謝の言葉といたします。

新任のご挨拶　新理事長　滝本一男



経　歴

1951年10月13日生まれ（73歳）小田原市穴部在住
NECで技術教育担当、ソフトウェア関係企業起業、
現在、食品輸入会社経営。

この度、理事長を拝命いたしました滝本です。

経験は浅く、未熟な点も多々ございますが、理事・スタッフ、会員の皆様の支えと、これまで築かれてきた本センターの理念を礎に、社会的使命の継承とさらなる発展に尽力する所存です。

会社生活から独立後、パートナーと始めた食品輸入事業を通じて、2020年の秋、賞味期限が迫る食品の扱いに悩む中で、報徳食品支援センターと出会い、生活困窮家庭への寄贈が実現できた経験が、現在の活動の原点となっています。

企業から提供される冷凍食品を、冷凍状態のまま末端の支援団体へ届けられる体制を構築し、冷凍ストッカーの無償貸与も実施いたしました。

今年度はこれをさらに進化させ、以下の重点事業に取り組んでまいります。

① 自前キッチンの整備と調理食品の拡充

業務用調理器具を整え、高たんぱく・高栄養の冷凍食品を活用した惣菜やご飯類を提供できる体制を整備しました。現在は市内の五か所の市営住宅および母子寡婦会に提供を行っており、今後さらに提供先を拡大してまいります。

② 地域包括支援センターとの連携強化

地域包括支援センターとの連携により、緊急性の高い支援ニーズに迅速に対応可能な体制を構築していきます。

③ 高校生への食支援

2市8町の高校に在籍する、生活困窮家庭の生徒に対する食支援も充実させてまいります。スクールソーシャルワーカーや教育相談コーディネーターの方々と連携し、確実な支援につなげてまいります。

④ 会員の拡大

また、現在、会員の拡充にも力を入れておりますぜひご友人やご近所の方、また企業・団体の皆様に、当センターの活動をご紹介いただき、ご入会のお勧めをお願い申し上げます。

今後とも、報徳食品支援センターをどうぞよろしくお願い申し上げます。

報徳食品支援センターも食品不足です。
食品のご提供お願いします。

最近食品の入荷が減少しています。コロナ禍が明けて、外食も盛んになり、インバウンド需要もあり、主食・副食の類が大幅に減りました。缶詰類も入荷が減っています。今でも継続して入荷するものは、飲料・お菓子といったものが中心です。つまり、食事・生活に直結する食品のご寄贈が減っているのです。

子ども食堂等から「お米はありませんか?」とのお問い合わせもいただきますが、「こちらもありません」とお断りしている状況です。多少、備蓄米の放出分が回ってきますが、地域からのご要望にお応えするのが難しい状況です。

県西地域の皆様方に、食品の提供をお願い申し上げます。当地で物価高で生活に困っていられる人たちのためです。

編集後記

報徳食品支援センターは、新しいメンバーで、新しい方針で進んでいきます。変わらぬご支援をお願いします。